

幼児期の肢体不自由児をもつ父親の養育行動の獲得プロセス

著者	竹村 淳子
発行年	2004-03-25
URL	http://hdl.handle.net/10422/381

学 位 記 番 号： 修士第48号

氏名（本籍）： 竹 村 淳 子（滋賀県）

学 位 の 種 類： 修士（看護学）

学位授与年月日： 平成16年3月25日

学位論文題目： 幼児期の肢体不自由児をもつ父親の養育行動の獲得プロセス

論文内容要旨

※整理番号	49	(ふりがな) 氏 名	たけむら じゅんこ 竹村 淳子
修士論文題目	幼児期の肢体不自由児をもつ父親の養育行動の獲得プロセス		
<p>研究の背景</p> <p>肢体不自由児の世話には手がかかるため、母親は周囲の助けを得て子どもの世話を引き受けていた。肢体不自由児は、医療的ケアや訓練など特別な配慮を必要とし、父親も何らかの世話をしていると考えられるが、肢体不自由児の養育を父親はどのように引き受けているのか、明らかになっていない。</p> <p>研究目的</p> <p>幼児期の肢体不自由児をもつ父親が、どのようにして養育行動を獲得してきたかを明らかにする。</p> <p>研究方法</p> <p>シンボリック相互作用論を基盤としたグラウンディドセオリーを用いた質的研究方法により、幼児期の肢体不自由児をもつ 12 名の父親に半構成的面接を行った。面接内容は研究参加者の許可を得て録音し、逐語録に転記した上でコード化し、概念を精緻化していった。</p> <p>結果</p> <p>分析内容から 946 文節に区切ってコード化し、6 つの上位カテゴリ、21 の中位カテゴリ、66 の下位カテゴリが抽出された。それらは相互に関係し、以下のような文脈をもって説明された。</p> <p>父親は、【障害児の世さに四苦八苦】する経験から、【世話を回避できない妻の姿につき動かされる】ように、子どもの世話に手を出していた。障害児の世話と仕事のはざまで葛藤しながら父親はこれまでの自己と対峙し、【あるべき障害児の父親像を模索】した。父親は、【障害児の世さに四苦八苦】した経験で、【障害児と暮らす土壌を作る】と同時に、【新たな障害観を手にする】ことができた。この 2 つを獲得することで【あるべき障害児の父親像を模索】する段階を抜け、やがて父親は、【夫婦でやっ払いこうと腹をくくる】信念をもつようになった。</p> <p>考察</p> <p>父親が、【障害児の世さに四苦八苦】する経験は、妻の大変さを理解する前提となり、【世話を回避できない妻の姿につき動かされる】という次の行動を父親に促している「文脈」となった。この父親の行動の起こし方は、妻の大変さを受けて、自分の行動を方向付けるという特徴が見られた。</p> <p>【あるべき障害児の父親像を模索】するにいたる過程では、父親はできる限り仕事を調整し世話をする経験を通して、障害児を育てる父親としてのあり方に苦悩していたと考えられた。</p> <p>【障害児と暮らす土壌を作る】と【新たな障害観を手にする】は、「関連する条件」であり、この 2 つを獲得することで【あるべき障害児の父親像を模索】する段階から抜けることができる。この段階に達した父親は、「帰結」となる【夫婦でやっ払いこうと腹をくくる】信念をもったと考えられた。</p> <p>父親が夫婦でやっ払いこうと覚悟をするのは、問題を自分の中に留め、家族の中で解決を図ろうとする男性特有のコーピング行動であると考えられた。</p> <p>総括</p> <p>幼児期の肢体不自由児をもつ父親の養育行動の獲得プロセスは、父親が【障害児の世さに四苦八苦】することから【夫婦でやっ払いこうと腹をくくる】にいたるまでのプロセスであった。</p>			

- (備考) 1. 研究の目的・方法・結果・考察・総括の順に記載すること。(1200 字程度)
2. ※印の欄には記入しないこと。